

〈研究ノート〉

ガンダーラにおける 阿弥陀信仰についての一考察

山 中 行 雄

【抄録】

1982年 John Brough によって、あるガンダーラ仏像の台座に刻された碑文が阿弥陀仏と観音菩薩に言及したものであると報告され、注目を集めた。さらに、John Brough はこの碑文の年代を紀元後2世紀と推定した。

その後、この碑文の解釈を巡って議論がなされたが、未だ最終的な解決が出たわけではない。

一方、パキスタン北部で発見された碑文群は、北西インドの仏教信仰の実情を研究する上で大きな意味を持ち、本稿で論じる当該のカローシュティー碑文を考察する上でも、示唆に富むものである。

本稿では、これらのパキスタン北部碑文資料を参照しながら、当該碑文を再検討しガンダーラ地域における阿弥陀信仰を論じる。

キーワード：ガンダーラ語、阿弥陀仏、観音菩薩

1 問題の所在

これまで、「舎衛城の神変」と解釈されてきたモハンマド・ナリの彫像が Huntington (1980) および Quagliotti (1996) らによって *Sukhāvati* を表現したものであると新たに解釈され、ガンダーラ地域が浄土信仰の中心地であったとする説が一挙に有力となり、今日に至る¹⁾。これ以前にも、Brough (1982) によって、あるガンダーラ仏像の台座に刻された碑文が阿弥陀仏と観音菩薩に言及したものであるとされ、注目を集めた。Brough (1982, 70) はこの碑文の年代を紀元後2世紀と推定した。

ところが、この像には阿弥陀に関する言及など、そもそもないとするのが Schopen (1987) である。しかしこの論文では Schopen は Brough による碑文の解読を否定しただ

1) 仏教美術の観点からガンダーラと阿弥陀信仰を関連付ける説については、能仁 (2008, 11-12) を参照されたい。

けで、新しい読みを呈示したわけではなかった。また、Broughの読みを承認しながらも、ガンダーラに阿弥陀信仰があったという意見には懐疑的なのが、Fussman (1999)である。一方、岩松 (1994) は当該碑文 (岩松は当時 Brough の読みを承認していた) とガンダーラ美術の両面から、ガンダーラに阿弥陀/浄土信仰が存在したと主張していた。その後、Salomon/Schopen (2002) は、ようやく碑文の新しい読みを呈示し、Broughの説を完全に否定した。岩松 (2006) は、1994年に主張した自説に修正を加え、Salomon/Schopen (2002) による碑文の読みを基本的に支持を表明する。しかし、岩松はSalomon/Schopen (2002) とは異なる解釈をしている。この岩松の、Brough (1982) および Salomon/Schopen (2002) と異なる解釈も本稿で言及する。

村上 (2003/4, 22-24) は、彼の大乘起源論において当該碑文を取りあげ、後述する北パキスタン出土の碑文資料などの様々な資料に言及しながら論じている。村上は、当該碑文が阿弥陀仏と観音菩薩に言及していると考えているようだ。一方、藤田 (2007, 278-279) は Salomon/Schopen (2002) を全面的に受け入れているが、ガンダーラ地域に阿弥陀信仰が存在していた可能性までも捨てたわけではない。このように、上記の碑文は繰り返し議論されたが、未だ最終的な解決が出たわけではない。くわえて、浄土教文献に関する重要な発見が近年相次いでなされており、それらは当該碑文の再考を促すほどに意義深い。例えば、Schøyen Collection には、*Sukhāvāṭīvyūha* のサンスクリット写本断片が収録されており、紀元後6-7世紀のものとしてされている²⁾。したがって、その頃には阿弥陀仏信仰は、ガンダーラ地域に伝播していたと予想される。また、ガンダーラ地域における阿弥陀信仰に関係を持つと思われるテキストも近年発見された。Berlin・Humboldt 大学の Ingo Strauch (Strauch, 2007, 47-60) が、Bajaur Collection 中に阿闍仏に言及するテキストが収録されていることを報告している³⁾。さらに、Strauch (2007, 18) は、使用されているカローシュティー文字の字体等の判断基準から、Bajaur Collection の写本は紀元後1世紀後半から2世紀前半のものと推定している。このように、阿闍仏信仰に関する極めて古いテキストが、ガンダーラ地域から出土したことで、今後ガンダーラ地域と浄土信仰の研究は、新しい局面を迎えるであろう。

さて、前述のパキスタン北部で発見された碑文群は、北西インドの仏教信仰の実情を研究する上で大きな意味を持ち、本稿で論じる当該のカローシュティー碑文を考察する上でも、示唆に富むものである。これらの北パキスタン出土の碑文資料は、1979年以来

2) Harrison, Hartmann and Matsuda (2002, 183).

3) Strauch (2007, 47-60). このテキストは、漢訳、チベット訳の『阿闍仏国経』と共通句を持つておらず、『阿闍仏国経』とは異なる、一つの独立した經典であった可能性もある。

ドイツ・フランス・パキスタンによる共同調査研究がなされ、30,000の岩石刻画と5,000を超える碑文が存在したと推定されており、残された資料は紀元前2世紀から1,000年に及ぶとされる⁴⁾。本稿では、特に *Chilās* および *Thalpan* で発見された仏教碑文群に注目し⁵⁾、これらの碑文資料を参照しながら当該碑文を再検討し、ガンダーラ地域における阿弥陀信仰を論じる。

2 碑文

Brough (1982, 65) によれば、問題の碑文を具えた仏像は、Charles Kiefer によって1961年8月にタキシラで発見されたが、同年9月にはすでに行方不明になっていた。したがって、Brough も碑文を実際にみたわけではなく、Charles Kiefer から送られた写真で碑文を解読した。さて、Salomon/Schopen (2002, 9) によると、この像は2001年当時にはフロリダの Ringling 博物館に収蔵されており、Salomon が現物を見た。また、Salomon/Schopen (2002, 4, fig. 1) に、仏像の全体写真および、Salomon/Schopen (2002, 7, fig. 2) に碑文の鮮明な拡大写真が掲載されており、それを見る限り、Schopen/Salomon の読みがよりよいように思える。以下に両者による碑文の Transcription と訳をそれぞれ挙げておく。

Brough (1982, 66)

budhamitrāsa olo' iṣpare danamukhe budhamitrāsa amridaha

“The Avalokiteśvara of Buddhāmītra, a sacred gift, the Amṛtābha of Buddhāmītra...”

Salomon/Schopen (2002, 27)

dhamitrāsa oloīṣpare danamukhe budhamitrāsa amridae

“Gift of Dhamītra at Oloīṣpare for the immortality of Buddhāmītra...”

碑文の中ほどにある *danamukhe*（寄進物、贈物）と、それに続く *budhamitrāsa*（ブダミトラの）は、はっきりと記されており問題なく読める。議論的になっているのは、最初の *dhamitrāsa*、次の *oloīṣpare*、最後の *amridae* という三語の解読あるいは解釈である。以下にこれらの三語を検討する。

4) これらのパキスタン北部の碑文については塚本 (2003, iii-iv) を参照。

5) *Chilās* は大凡イスラマバードの北東499km、ギルギットの南145kmに位置する。*Thalpan* は *Chilās* から見るとインダス川を挟んだ北東の対岸にある。その他 *Chilās* に関する地理的・歴史的背景については塚本 (2001) を参照されたい。

2.1 dhamitrasa

Dhamitra という寄進者名は、Schopen/Salomon に一応認められはいるが、Dharmamitra の書き損じである可能性が指摘された。また、岩松 (2006, 1033) も、この碑文には、奉献者自身の名前が記されており、主尊の足下に彫刻されている出家者らしき小人物が奉献者であるという主張から、出家者らしい Dharmamitra という名を想定している。しかし、定方 (2006, 80-81) は Dhamitra という人物名が、平山郁夫シルクロード美術館所蔵の仏像に刻されていることを指摘し、Dhamitra という名が書き損じである可能性は少ないとしている。Dhamitra という名は、非常に奇異な印象を与える名前ではあるけれども、実際にガンダーラ地域で使用されていた可能性が高くなってきた。

2.2 olo íspare

Brough (1982, 67-68) は、*olo íspare* という語が観音菩薩を指し示すものとして考えた。それに対し、Salomon/Schopen (2002, 26-27) は碑文中の *olo íspare* を未知の場所ととり、*-e* を依格として、“at Oloíspare” と訳している。碑文にあらわれる地名が未同定である例としては、Senavarma 碑文中の *Ođi* という地名である⁶⁾。この *Ođi* が、どこにあったのかは未だ不明である⁷⁾。Salomon/Schopen (2002) は、この *olo íspare* もそのような未知の場所として考えている。岩松 (2006, 1033-1031) は、*olo íspara-* は、skt. *Avalokeśvara* に対応し、観音菩薩を指すのではなく、阿弥陀仏の異称であるとする。岩松は、その考察の過程を詳しく述べてはいないので、彼がなぜそう考えたのかについては不明瞭である。

このように、*oloíspare* という語の解釈が全く一致しないので、この語をもう一度分析してみる必要があるだろう。まず、*oloíspare* という語の後半部分から論じてみる。ガンダーラ語では *-śv->-śp-* の対応関係が知られている⁸⁾：Senavarma 碑文 1b, 14c *íspara-* < skt. *īsvara-*。したがって、*oloíspare* の *śpara-* が *Avalokiteśvara* の *śvara* に対応するというのは、十分可能である。

次に前半部の考察に移りたい。語頭の *o* だが、*o* < *ava* の対応関係は中期インド語の諸語で共通に見られる現象であり、またガンダーラ語においても同様である：Khvs-G⁹⁾

6) Senavarma 碑文：Fussman, Gérard: “Documents épigraphiques Kouchans (III). L’inscription de Senavarma, roi d’Ođi: une nouvelle lecture”, *Bulletin de l’École Française d’Extrême-Orient*, Vol. 71 (1982), No. 1, pp. 1-46.

7) *Ođi* は Swāt 地方地方と結びつけられることが多いが、Fussman (1982, 12) は、*Ođi* が Swāt 地方にあったとする見解に懐疑的である。

8) Bailey (1980, 25). Mehendale (1948, §524 (c) (i), (ii)) によれば、*-śv-* は、*-śp-* に変化する場合と *-śv-* のまま、保持される場合がある。

9) Khvs-G: Salomon, Richard: *A Gāndhārī Version of the Rhinoceros Sūtra: British Library Kharoṣṭhī fragment 5B*, with a contribution by Andrew Glass. Gandhāran Buddhist texts v. 1. Seattle: University

19a *ośaḍaita* < **avaśāṭayitvā*. したがって、語頭の *o* が *ava* であったと想定するのは可能である。非常に難しいのは語中の *-loi-* である。簡潔に言えば、*Avalokiteśvara* の *-lokite-* が当該碑文中の *-loi-* に対応するとは考え難い。中期インド語一般では、*loka* > *loga* > *loya* > *loa* という音韻変化の流れが考えられる。この法則は、カローシュティー碑文資料の言語においても当てはまり、*k, g* など喉音が、母音間で消失する現象が知られている：Mehendale (1948, § 508 (i)) *loka* > *loa*. しかし、歯音の *t* は *d* に変化したり¹⁰⁾、あるいは摩擦子音 (fricative) へと変化する¹¹⁾。つまり、*t* は *k* とは異なり、消失しない。したがって、例えば *avalokita-* > **oloida-* と変化することが予想されるのである。ところが、*oloišpare* には *it* に相応する音が欠けている。

Brough (1982, 67) は、『無量清浄平等覚経』における観音の古訳「盧樓亘」を引き合いに出し、「盧樓亘 (*ḷāp-lu-siwan*)」にも *it* という音が欠けていることを指摘した¹²⁾。さらに、Brough (1982, 67-68) は *oloišpare* の原語に関して、**ulokeśvara* あるいは *ālokeśvara* などの可能性を示した。確かに、*uloka* は *Rgveda* に現れるが、中期インド語文献中でこの語の痕跡を指し示すようなものはないので、*oloišpare* の原語が **ulokeśvara* である可能性は低いように思われる。一方、岩松 (2006) は、前述のように *Avalokeśvara* を想定したが、これは観音を表すものでなく、阿弥陀の異称であるとした。*Avalokeśvara* が阿弥陀を指すということの根拠として、岩松は *Lokeśvararāja* から受記をされ、仏となったのが阿弥陀であるということを挙げる。しかし、*Lokeśvararāja* という名称は、観音をさすことが圧倒的に多い。例えば、パキスタン北部 *Chilās* で発見された岩面刻画の一つに、観音が彫られているが、この観音像の左側には、*namo Lokeśvarāya* (塚本, 2003, 136) という刻文がある (この像と碑文については第3章で論じる)。このように、*Lokeśvararāja* という名称と観音との結びつきは、非常に強く、岩松のように、*Lokeśvararāja* を介して、*Avalokeśvara* と阿弥陀を関連させようとするのはかなり問題があると思われる。

諸学者によって呈示された *olo išpare* の解釈のうちで、文献上の根拠を持ちうるのは、『無量清浄平等覚経』における観音の古訳「盧樓亘 (*ḷāp-lu-siwan*)」である。この音写語の問題は、今後再考する余地があるだろう。Mironov (1927) が指摘したように、観

↘ of Washington Press, 2000.

10) Mehendale (1948, 299-300, § 511).

11) Mehendale (1948, 300, § 511b).

12) 「盧樓亘」の *ḷāp-lu-siwan* という中古音の再構築は、Brough (1982, 67) によるもの。「亘」の中古音は、Pulleyblank (1962a, 131) ; Pulleyblank (1962b, 218) によれば、*siwen* である。一方、藤堂明保篇『学研・漢和大辞典』では、*siuɛn* である。また、Brough (1970, 83-84) も参照されたい。

音の原語は常に一定であったわけではなく、さまざまな変遷を経ており、写本等で遡れる限り *Avalokitasvara* が古形である¹³⁾。つまり、観音菩薩を指し示す原語は、時代によって変化していたわけである。さらに、辛嶋 (1999, 136) が指摘するように、『大阿弥陀経』や『無量清浄平等覚経』には、西北インド方言の影響を思わせる音写語が含まれている。したがって、『無量清浄平等覚経』に現れる「盧樓亘」の原語が、*oloišpare* と非常に近似する語形であった可能性は十分ある。

また、Salomon/Schopen (2002, 23-26) は、*olo išpare* という語が観音菩薩と全く関係がないと述べているが、その論拠としては、仏・菩薩名が *bhagavant* など敬称等がなく言及されることはあり得ないというものである。これに関しては本稿第3章で検討する。

2.3 amridae

Brough (1982, 68) は、skt. *Amitābha/Amitāyus* の前半部が、若し中期インド語で形成されたなら、skt. *amita* あるいは *amṛta* のいずれも可能であるとする¹⁴⁾。Brough (1982, 68) は特に、『無量壽如來(修)觀行供養儀軌』(大正19, no. 930) 中の「無量壽如來根本陀羅尼」を引き、ここに *amṛta* という語が10回現れることを指摘して、*Amita-* は skt. *amṛta* を暗黙に示唆しているとする¹⁵⁾。つまり、Brough は *amridae* の前半部 *amrida-* は、skt. *Amitābha/Amitāyus* の前半部に対応することが可能であると考えている。

これに対し、Salomon/Schopen (2002, 10) は、skt. *amṛta* のガンダーラ語形は *amuda* であると、碑文や K-Dhp¹⁶⁾ での用例を挙げて反論してはいるが、Salomon/Schopen (2002, 7-8, 10) は、MPS-G¹⁷⁾ (p. 258, 262) で *mṛita-* という語が使われていることを指摘し、*mṛita-* の否定形として *amrida-* は、サンスクリット語化されたガンダーラ語で可

13) なお、この問題に関して、Brough (1970, 83-84) も玄応の『一切経音義』を引きながら論じている。また、Mironov (1927, 249; 251-252) は、*Avalokitasvara* と *Lokeśvara* という二つの観音を示す語が、一つに短縮されたものが *Avalokiteśvara* であると言う。これに関しては本田 (1934, 261-264) は、批判的に言及したが、本田自身も *Avalokitasvara* と *Lokeśvara* という二つの語が観音を指すことに疑義を挟んではない。これは俄には受け入れがたいが、観音の名称が変遷を経ているために、このような議論が生じるのであろう。

14) 「阿弥陀」の原語が中期インド語で、且つ skt. *amṛta* を意味していたかどうかについては、これまで何度も議論されてきた。これまでの議論の概観については、Nattier (2005, 190) を参照されたい。

15) なお、『五千五百佛名神呪除障滅罪經』(大正14, no. 443) にも、「無量壽如來根本陀羅尼」とよく似た陀羅尼が現れる。この『五千五百佛名神呪除障滅罪經』の中央アジア出土サンスクリット写本断片については、von Hinüber (1987/8) を参照されたい。

16) K-Dhp: Brough, John: *The Gāndhārī Dharmapada*, edited with an Introduction and Commentary. London Oriental Series 7. London: Oxford University Press, 1962.

17) MPS-G: Allon, Mark and Richard Salomon: "Fragments of a Gāndhārī Version of the Mahāparinirvāṇa-sūtra in the Schøyen Collection", in Jens Braarvig ed. *Buddhist Manuscripts I*, Oslo: Hermes Publishing, 2000, pp. 243-273.

能であることを認める。しかし、結局 Salomon/Schopen (2002, 11-12) は、skt. *Amitābha* が、後期のカローシュティー文書にみられるようなサンスクリット語化されたガンダーラ語形として現れたなら、むしろ **amridabhe*, **amridavhe* 等になるはずであって、*amridae* となる可能性は低いとする。また、彼らは *amridae* を skt. *amṛta* の与格と考え、*for the immortality* として考え、さらに当該碑文の skt. *amṛta* を skt. *nirvāṇa* と同義語であるとして、碑文に見られる「涅槃に資するように」というという意味で解釈した¹⁸⁾。しかし、岩松 (2006, 1030) が指摘するように、たしかにカローシュティー碑文にも「涅槃に資するように」という表現はいくつか見られるが、この場合、常に skt. *nirvāṇa* という語が使用されており、skt. *amṛta* を同義語として使った例は知られていない。

北パキスタンの Thalpan で発見された碑文に、阿弥陀仏に言及するものがいくつかあるが、そのうちの一つに、*namo Amritā (bhya) tathāgatāya* と刻されたものがある¹⁹⁾。この碑文自体はブラフミー文字で刻されており、カローシュティー文字ではないが、この碑文に現れる *Amritā (bhya)* という語は重要である。この Thalpan の碑文により、音韻論上の問題をひとまず措くとしても、北パキスタンでは、*Amitābha* が *amṛta* と関連づけられていたことが明示された。隣国のアフガニスタンを含めた北西インド文化圏においても、そうであった可能性は十分高い。

さて、問題は後半部である。Brough (1982, 66) は、*amridaha* と読んだが、Salomon/Schopen (2002, 8-11) は、後半部の *ha* という字はないとした。確かに *ha* という字は見えない。

一方で、Brough (1982, 68) はカローシュティー写本において、skt. *Amitābha* の *-ābha* が、*-ahu*, *-ayu* における nom. sing. の *-aha*, *-a'a* と現れる可能性を指摘している。さらに辛嶋 (1999, 141, n.34) は、*Amitābha* は西北インド方言で **Amidāha* となり、さらに **Amidāhu* > **Amidā'u* > **Amidāyu* へと変わるとする。つまり、Brough (1982, 68) も辛嶋 (1999, 141, n. 34) も、*Amitābha* から *Amitāyus* がガンダーラ語を通じて派生したことを示そうとしているが、*Amitābha* と *Amitāyus* の関係は、本稿では論じない。あくまで当

18) Salomon/Schopen (2002, 16) は、証拠として大英博物館所蔵の仏像台座に刻された紀元後4、5世紀のブラフミー文字による碑文を挙げている：*satvānam eva tacchāntyaī syād eṣāṃ cāmṛtaprada [m]*, “May it be for the peace of [all] beings, and [may it] produce immortality [i. e. *nirvāṇa*] for them.” (英訳は Schopen/Salomon による)。

19) 塚本 (2003, 169-170). von Hinüber (1989, 92, pl 179, n. 99) ; この論文は、この Chilās および Thalpan に於ける仏教碑銘の詳細なりポートであるが、著者の von Hinüber 自身が、von Hinüber (1987/8, 246, n. 15) で、このレポートの問題点を指摘している。それによれば、当時出版予定であった上記1989年の論文の印刷ミス-当時、すでに彼自身が指摘していた-を編集者が訂正せず、結果、1989年の論文は参照すべきでない箇所を含んでいるということである。しかし、*Amritā (bhya)* という語があらわれる、この碑文については、von Hinüber (1987/8, 249) で言及しているので、これに関しては、印刷ミス等の誤りはないと思われる。

該碑文に係る *Amitābha* における *-bh-* の消失について検討したい。

ガンダーラ語における *-bh-* の消失は、辛嶋 (1994, § 2.4.6, § 2.8. (i)) が指摘している。Salomon/Schopen (2002, 11) もまた、*aśua* < skt. *aśubhā*, *-ām* という語を挙げて、ガンダーラ語における *-bh-* の消失を認めてはいるが、この変化はかなり特殊 (*anomalous*) な変化であるとする。

そもそも、von Hinüber (2001, § 191) が指摘するように、ガンダーラ語における *-bh-* は、*-β-* と発音され、表記上 *-vh-*, *-h-*, あるいは *-bh-*, *-h-* と書かれる²⁰⁾。そして、*-bh-* から由来する *-vh-*, *-h-* (*-β-*) は、簡単に消失したわけではなく、カローシュティー碑文資料による限り紀元後2世紀では、*-bh-* に由来する *-v (r) -* が筆記されている²¹⁾。したがって、ガンダーラ語において *-bh-* が筆記されなくなるのは、おそらく紀元後2世紀よりも後になると考えられる。Brough (1982, 70) は当該碑文の年代を紀元後2世紀と推定したが、*amridae* が、もし当該碑文が阿弥陀仏の名を言及しているとしたら、その年代はもっと遅いものとなるはずであろう。また、カローシュティー碑文資料において、*-a* 語幹の男性名詞の主格形が *-e* で現れることは報告されており²²⁾、Salomon/Schopen (2002, 15-16) のように、*amridae* を与格と考える絶対的な根拠はない。

3 仏・菩薩の敬称について

これまで中期インド語とりわけガンダーラ語の言語的な特徴を中心にして当該碑文を論じてきた。この章では、言語上の問題ではなく仏教碑文の文体上の特徴を論じる。

Salomon/Schopen (2002, 24-25) が、この碑文に阿弥陀や観音が言及されていないと考えた、さらなる一つの有力な論拠としては、仏・菩薩名が *bhagavant*, *ārya* などの敬称なしで、言及されることはあり得ないというものである。大部分の仏教碑文において、それは確かに当てはまる。一方、当該碑文には *bhagavant*, *ārya* などの敬称は現れていない。

ここで、再び Chilās および Thalpan で発見された碑文群に注目したい。当地で発見された碑文群の内に、阿弥陀と阿闍世への帰命文が見られるが、両者とも敬称が銘刻されていない：Chilās 129 *namo Amitā(bha)*; Chilās 130 *namo Akṣobhya*²³⁾。また、Chilās 122の岩石刻文は、観音坐像の左側に刻されているものだが、ここには *namo Lokeśvarāya* と

20) Brough (1962, Introduction § 47) も参照。

21) Mehendale (1948, § 512 (d) (i)).

22) Mehendale (1948, § 529 (a) (ii)).

23) 塚本 (2003, 138-139).

いう帰依文が見られる²⁴⁾。観音の別名として *Lokeśvara* が確立していたことが伺えるが²⁵⁾、ここでも、観音菩薩に対する敬称は見られない。上記のように、仏・菩薩名が敬称なしで言及されるケースは存在しており、*bhagavant* などの敬称なしで仏・菩薩名を言及してはならないという規則が守られないことがあった。したがって、*bhagavant*、*ārya* などの敬称がないからといって、仏・菩薩名が言及されていないと断言することは、拙速な議論になる可能性がある。

4 結び

以上、当該碑文の分析を試み、この碑文が観音や阿弥陀に言及しているのか、否かを検証した。筆者は、当該碑文が観音や阿弥陀に言及している可能性が高いことを示したと考えるが、それでも、検証の過程で、様々な問題点も明らかになった。

Brough (1982, 70) は、当該碑文の年代を紀元後2世紀としたが、本稿第2章で検討したように、言語的な側面を鑑みると、もっと時代が下る可能性がある。カローシュティー文字は、インドで紀元後450年頃、中央アジアでは紀元後7世紀頃まで使用されていたとされる²⁶⁾。したがって、若干碑文の年代を遅く設定することも可能なように思えるが、当該碑文が記されていた仏像全体の作成年代とも関わるので、稿を改めて論じたい。

参考文献

- Allon, Mark and Richard Salomon (2000) "Fragments of a Gāndhārī Version of the Mahāparinirvāṇasūtra in the Schøyen Collection", in Jens Braarvig ed. *Buddhist Manuscripts I*, Oslo: Hermes Publishing, pp. 243-273.
- Bailey, Harold Walter (1980) "A Kharoṣṭhī inscription of Senavarma, King of Oḍi", *Journal of the Royal Asiatic Society*, pp. 21-29.
- Brough, John ed. (1962) *The Gāndhārī Dharmapada*, London Oriental Series 7, London: Oxford University Press.
- Brough, John (1970) "Nugae Indo-sericae", in *W. B. Henning Memorial Volume*, London: Lund Humphries, pp. 81-88. (=Collected Papers. London: School of Oriental and African Studies. 1996, pp. 358-365.)
- (1982) "Amitābha and Avalokiteśvara in an Inscribed Gandhāran Sculpture", *Indologica*

24) 塚本 (2003, 136).

25) 塚本 (1996, 960) は、この碑文を *Chilās 11* とし、阿弥陀仏を言及するものと記しているが、塚本 (2003, 136) では観音菩薩を言及するものとして解釈を変更した。上記の刻画が観音菩薩を表現していると考え直したからであろうか。

26) Falk (1993, 99).

- Taurinensia*, Vol. X, pp. 65-70. (=Collected Papers. London: School of Oriental and African Studies. 1996, pp. 469-473.)
- Falk, Harry (1993) *Schrift im alten Indien*, Script Oralia 56, Tübingen: Gunter Narr.
- 藤田宏達 (2007) 『浄土三部経の研究』, 岩波書店, 東京.
- Fussman, Gérard (1982) "Documents épigraphiques Kouchans (III). L'inscription de Senavarma, roid' Ođi: une nouvelle lecture", *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, Vol. 71, No. 1, pp. 1-46.
- (1989) "Gāndhārī écrite, gāndhārī parlée", in Colette Caillat ed. *Dialectes dans les Littératures Indo-Aryennes*, Paris: Collège de France, Institut de Civilisation Indienne, pp. 433-501.
- (1999) "La place des Sukhāvātī-vyūha dans le bouddhisme indien", *Journal Asiatique*, Vol. 287, No. 2, pp. 523-586.
- Harrison, Paul, Jens-Uwe Hartmann, and Kazunobu Matsuda (2002) "Larger Sukhāvātīvyūha", in Jens Braarvig ed. *Manuscripts in the Schoyen Collection-III. Buddhist Manuscripts, Vol. II*, Oslo:Hermes Publishing.
- von Hinüber, Oskar (1987/8) "Dhāraṇīs aus Zentralasien", *Indologica Taurinensia*, Vol. 14, pp. 231-249, 3 figs.
- (1989) "Buddhistische Inschriften aus dem oberen Tal des Indus", in Karl Jettmar, Ditte König, and Volker Thewalt eds. *Antiquities of Northern Pakistan. Reports and Studies. Vol. I: Rock Inscriptions in the Indus Valley*, Mainz: Verlag Philipp von Zabern, pp. 73-106.
- (2001) *Das ältere Mittelindisch im Überblick*, Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften. 2., erweiterte Auflage (1. ed. 1986). Österreichische Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-Historische Klasse. Sitzungsberichte, 467. Band. Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Südasiens. Heft 20.
- 本田義英 (1934) 『仏典の内相と外相』, 弘文堂書房, 東京.
- Huntington, J. C. (1980) "A Gandharan Image of Amitāyus' Sukhāvātī", *Annali. Istituto Orientale di Napoli Roma*, Vol. 40, No. 3, pp. 651-672.
- 岩松浅夫 (1994) 「ガンダーラ彫刻と阿弥陀仏」, 『東洋文化研究所紀要』, 第123冊, 209-246頁.
- (2006) 「amridaha/amridae 銘像は果して阿弥陀仏を表すに非ざるか: ガンダーラ彫刻の一碑銘の解釈をめぐって」, 『印度學佛教學研究』, 第54巻, 第2号, 1036-1028頁.
- Konow, Sten ed. (1929) *Kharoshthī Inscriptions: With the Exception of Those of Aśoka*, Corpus Inscriptionum Indicarum v. 2, pt. 1, Calcutta: Govt. of India, Central Publication Branch.
- Mehendale, Madhukar Anant (1948) *Historical Grammar of Inscriptional Prakrits*, Deccan College Dissertation Series 3, Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute.
- Mironov, N. D. (1927) "Buddhist Miscellanea", *Journal of the Royal Asiatic Society*, Vol. 1927, pp. 241-279.
- 村上真完 (2003/4) 「大乘仏教の起原」, 『インド学チベット学研究』, 第7・8号, 1-32頁.
- Nattier, Jan (2005) "The Names of Amitābha/Amitāyus in Early Chinese Buddhist Translations (1)", 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』, 第9巻, 183-199頁.
- 能仁正顕 (2008) 「ガンダーラ出土仏三尊像と大阿弥陀経」, 『印度學佛教學研究』, 第57巻, 第1号, 11-18頁.

- Pulleyblank, Edwin George (1962a) "The Consonantal System of Old Chinese I", *Asia Major. New Series*, Vol. 9, pp. 58-144.
- (1962b) "The Consonantal System of Old Chinese II", *Asia Major. New Series*, Vol. 11, pp. 206-265.
- Quagliotti, Anna Maria (1996) "Another Look at the Mohammed Nari Stele with the So-called 'Miracle of Śrāvāsti'", *Annali del Istituto Universitario Orientale, Napoli*, Vol. 56, pp. 274-289.
- 定方 晟 (2006) 「寄進者ダミタラ」, 『東海大学名誉教授会年報』, 第1巻, 78-82頁.
- Salomon, Richard and Gregory Schopen (2002) "On an Alleged Reference to Amitābha in a Kharoṣṭhī Inscription on a Gandhāran Relief", *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, Vol. 25, No. 1-2, pp. 3-31.
- Schopen, Gregory (1987) "The Inscription on the Kuṣān Image of Amitābha and the Character of the Early Mahāyāna in India", *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, Vol. 10, No. 2, pp. 99-134.
- 辛嶋静志 (1994) 『『長阿含経』の原語の研究—音写語分析を中心として』, 平河出版社, 東京.
- (1999) 「『大阿弥陀経』訳注 (一)」, 『佛教大学総合研究所紀要』, 第6号, 135-150頁.
- Strauch, Ingo (2007) "The Bajaur Collection: A New Collection of Kharoṣṭhī Manuscripts - A Preliminary Catalogue and Survey -", Online version 1.0. <URL: http://www.geschkult.fu-berlin.de/e/indologie/bajaur/publication/strauch_2007_1_0.pdf>.
- 塚本啓祥 (1996) 『インド仏教碑銘の研究 I』, 平楽寺書店, 京都.
- (2001) 「インド仏教碑銘拾遺 (3) Chilas II の刻文」, 『法華文化研究』, 第27巻, 1-26頁.
- (2003) 『インド仏教碑銘の研究 III / パキスタン北方地域の刻文』, 平楽寺書店, 京都.

(やまなか ゆきお 嘱託研究員)

2009年11月25日受理

〈Summary〉

A Study of Faith in Amitābha in Gandhara

YAMANAKA Yukio

In 1982 John Brough reported that an inscription on a pedestal of a Buddha-figure from Taxila might refer to the name of the Buddha Amitābha and Bodhisatva Avalokiteśvara. Further, he dated this inscription to 2 A.D.

Thereafter this inscription has been discussed repeatedly, but no general agreement as to the interpretation has been reached.

On the other hand, certain inscriptions found in Northern Pakistan are significant for the historical study of faith in Buddhism in Northwest India.

Moreover they are also important materials for a reconsideration of the above-mentioned inscription on a pedestal of a Buddha-figure.

In this article I take the inscriptions from Northern Pakistan into consideration and reconsider the above-mentioned inscription in order to contribute to the study in faith in the Buddha Amitābha in the Gandharan area.

Key words: Gāndhārī, Amitābha, Avalokiteśvara